



あゆみ

学校だより 2月号

親子で食事 親子で会話
親子で読書



校長 鈴木 学 平成26年2月25日

年度末に想う児童の成長

14日の授業参観・学級懇談へのご出席、誠にありがとうございました。どのクラスに於いても、1年間のお子さんの成長をご確認いただけたことと思います。

21日には、1年生が幼稚園の年長さんを招待しての交流会がありました。優しく手を引いてあげる姿は、とても頼もしく、もうすっかり2年生です。

この他に、最近、私が感じた子どもたちの成長の様子をいくつか紹介します。

【その①】

19日、津野田教頭が朝の登校指導をした際、立哨当番のお母さんから「『いつもありがとうございます』と言って通る子がいたので、とてもうれしくなりました」と言われたそうです。こんな子がどんどん増えて欲しいと願います。

【その②】

1月31日に、1年生が生活科の学習で、祖父母やボランティアの方から昔遊びを教えてくださいました。この日は風が強く、ボランティアさんの自転車が何台か倒れてしまいました。たまたま通りかかってそれを見つけた5年生が、だまって自転車を起こしてくれました。

【その③】

毎朝の清掃ボランティアに加え、雪かきボランティアを6年生が中心になってがんばってくれました。

17日に行われた、ボランティア感謝の会の挨拶でも申し上げたのですが、睦小の子どもたちは、学校支援ボランティアさんのお姿から、ボランティアの大切さを学び、自分たちも実行しようとする意識が自然に育っているのだと思います。

【その④】

なわとび集会（大縄をクラスみんなで次々に跳び、4分内に何人続けて跳んだかを競う）の練習中に、つかえた子に対し「ドンマイ！」という声をかけ合う姿がたくさん見られました。



【その⑤】

親から頼まれたPTA関係の通知を教頭先生に渡す時に、「父から頼まれてきました」と言った子がいました。「おとうさん」ではなく、「父」と言えるところが立派です。

高校生も挨拶をしてくれます 続けることの大切さ

体育館北側のT字路では、毎朝、佐山教務主任が登校指導をしています。

児童と同じ時間帯に、そこを自転車で通る男子高校生がいます。（南の方に行くので、石橋高校の生徒でしょうか。）

初めの頃は、佐山先生が挨拶をしても無言で通り過ぎていたのですが、徐々に挨拶を返してくれるようになり、いつの間にか、こちらが気づかないでいると、むこうから先に挨拶をしてくれるまでになったそうです。「どうせ挨拶をしても返ってこないのだから・」と思わずに、毎日挨拶を続けた佐山先生の粘り勝ちといったところでしょうか。今では、時々しか会わない私にも、その高校生は挨拶をしてくれるようになりました。

浅田真央ちゃんや葛西選手からだけでなく、佐山先生からも諦めないで続けることの大切さを学びました。

縄跳びジャンプ台の威力

校庭に縄跳び用のジャンプ台があり、休み時間には順番待ちの子どもたちでいっぱいです。厚いベニヤ板に角材で足をつけただけのものですが、子どもの体重によく合っているようで、ジャンプがしやすくなり縄跳び上達の強力な助っ人となっています。

3重跳びなどの難しい技ができたようになっただけの子もたくさんいます。

お父さんが、学校のものをご参考にご手作りにされてもよいかもしれませんね。(※インターネットにも製作体験がたくさん出ています)



本校は、NIE推進校です

NIEとは、「Newspaper in Education」の略称で「教育に新聞を」と訳されます。NIEの趣旨を一言でいえば、新聞を授業や学級活動などで利用しながら、子どもたちの社会性を養っていく運動です。NIEでの新聞活用には、記事やコラム・社説の部分的な利用から、切り抜かず新聞をそのまま子どもたちに読ませるやり方まで、さまざまな方法があります。

本校では、今年度から2年間、NIEの推進校としての取り組みをしています。複数の新聞を読み比べる、読んだ結果についてディベートを行う。といった学習もしていきたいと思っております。

新聞に載った本校の取り組み



読み聞かせサロン 読書の楽しさと大切さを実感

昨年に続き2回目の「読み聞かせサロン」が行われました。この会は、「我が子への読み聞かせが上手になりたい！」という保護者の声をもとに、図書館ボランティアの皆さんが企画・運営してくださ

っているものです。

今回は、業間の時間に図書室で読み聞かせをされた保護者の方3人が、そのときの本の紹介や子どもたちの様子を話してくださいました。



3人の方からは、「我が家の親子3代で大好きな本を読んで、喜んでもらったのが嬉しかった。」「初めは自分の得意な本を読んだが、読み方の上手・下手は、あまり気にしなくてよいことが分かった。」「我が子の好みとは違う本をリクエストされて読んだ。戸惑ったが、新しい本と出会えてよかった。」

などのお話がありました。

また、講師をお願いした「ふくべの会」の飯村さんが、皇后様の『読書の思い出を語る』より以下の言葉を紹介し、読書がいかに子どもたちにとって大切なものかを伝えてくださいました。

- ・子どもたちが、自分の中にしっかりした根を持つために
- ・子どもたちが、喜びと想像の強い翼を持つために
- ・子どもたちが、痛みを伴う愛を知るために

さらに、もう一つ、松岡享子さんの『サンタクロースの部屋』というお話も紹介してくださいました。

幼い日に、心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の心の中に信じるという能力を養う。心の中に、ひとたびサンタクロースを住ませた子は、心の中に、サンタクロースを収容する空間を作り上げている。サンタクロースその人は、いつかその子の心の外へ出ていってしまうだろう。だが、サンタクロースが占めていた心の空間は、その子の中に残る。この空間がある限り、人は成長に従って、サンタクロースに代わる新しい住人を、ここに迎え入れることができる。

後に、一番崇高なものを宿すかもしれぬ心の場所が幼い頃に養われる。そこには、魔法使いでも妖精でも、鬼でも仙人でもよい・・・幼い心に、これらの不思議の住める空間をたっぷりやってやりたい。